

うねりを上げていた火柱も、邪獣たちの咆哮も、絶え間なく聞こえていた波の音も。

全てが無音。

小さくなった、ということではない。

存在しなくなったのだ。

その唐突な変化は、音だけではない。

ノラン、火柱、邪獣、波、揺れていた船、明滅していた街灯——。

数ミリの動きもなく、あらゆるものが、その場で「^{こうちやく}膠着」していた。

それは「固定」と言った方がいいかもしれない。現にノランは必死の形相を浮かべたまま蠟人形のように固まっているし、その手から溢れる火柱も、零れる火の粉も、燃え盛る炎の不規則な形も、飴細工みたいに静止している。

その火柱が向かう先の猿の邪獣においては、なんと地から足が離れたまま、空中に浮いている。同じように、狼の邪獣は前足を浮かせている姿勢、孔雀の邪獣は翼を広げて急降下してくる姿勢のまま、一時停止していた。

時間が止まっていた。

静止した時の中で、動くものがあった。

「時を止める魔法か」

魔法を発動したネックは声の主——アルノルドを確認して目を大きく開いたがすぐに砂時計をポケットに突っ込んでへへと笑って見せた。

「ふむ、これは驚いたな。基礎魔法でも応用魔法でもない魔法を使える者がこの大陸にもいるとは」

アルノルドが近づいてきたが、ネックは背中を向けないよう一定の距離を保ちながら後退りした。

「試したのか」

「いや、それは偶然だ。私は魔法を無効化できるのでね。君たちの放った魔法を無効化しながら邪獣の息の根を止めようと思っただけだ」

「無効化……？」

アルノルドは両手を広げて首を大きく振りながら、

「信じ難いであろう？ 私もこの力を初めて使えた時は驚いたものだ。少年もそうであろう」と同調を求めた。

「……まあな」

ネックの瞳の揺らぎを見逃さなかったアルノルドは鋭い眼差しになり、

「少年よ、優しさは時に余計な種を振り撒くことになる」

諭すわけでもない、しかし何かを知っている者の声色だった。

ネックの口角が一瞬下がった。

「あんたの狙いはなんだ？」

「安心したまえ。私は君たちの敵ではない。が、私は世話を焼く側の人間でもない」

「だろうな」

目の前の三白眼の少年が、冗談は言っても一瞬たりとも警戒を解かない姿勢に、

「はは！ 愉快的な少年だな。ますます気に入ったぞ。あとで茶でも飲みながらゆっくり語らおうではないか」

と、自らの背を向けて両手を後ろに組む。

ネックも再び笑って見せ、

「奇遇だな、俺もあんたに聞きたいことが山ほどあるんだ」

「決まりだな。私はせっかちな人間でね、そろそろ魔法を解いてくれないか」

「この力について口外しないならいいぜ」

「他の者にも言っていないのか？」

アルノルドが振り向くと、ネックは頷くこともなく、ただじっと視線を向けた。

「……交換条件か、いいだろう」

アルノルドは右手に魔力を集中させ、綺麗に腕を伸ばして目の前に炎の壁を立てた。ネックは壁が立ち上がるのを見送ると砂時計をポケットにしまい、目を閉じた。

すると消えていた音が戻り、空間の振動が生まれ、再び時間が流れ始めた。

「!!」

孔雀の邪獣が驚愕の表情を浮かべる。それはそうだ。ノランの放った火柱を回避しようとアルノルド側に身を交わしたはずが、いつの間にか火の壁ができていたからだ。しかし避ける間もなく、孔雀の邪獣は吸い込まれていった。他の二体も同じだった。迫る攻撃を前に成す術もなく、ただ鳴くことしかできなかった。

「おい、あぶねえぞ！」

ノランが火柱の方に向かって叫んだ時には遅かった。ネックとノランの最大火力であればちょっとした林くらいなら余裕で焼き払える威力がある。二人の放った業火は三体の邪獣とアルノルドを飲み込んでいた。

一直線に並んだ三体の邪獣は業火に飲まれ、喚声を上げて絶命した。

アルノルドが服についた灰を払いながら炎の中から出てくるとノランは絶句した。

「美しさには欠けるが良い魔法だったな」